

戦争・戦災体験

● 梅里一丁目
笹岡 祥夫

(昭和三年生まれ)

戦争時代という、どうしても苦しいことだけが思い出される。生活物資の極端な不足、食糧難、極度の労働の強制など、どれをとっても悲惨なことばかりだった。とりわけ連日連夜に亘って飛来してくる米軍機の空襲には誰しも参ってしまった。

私が小学校三年のとき、昭和二年の七月七日に、中国と戦争状態に突入した。私の思い出はともその辺りからになるようだ。中国に侵入してから、急激に戦争が拡大されて、昭和一六年一月八日には、米英両国との戦いが始まってしまった。中国との戦いも、最初のうちは、日本の勝利を伝える報道だけで、中国の大都市を陥落させたということで、日本国中は、沸きに沸いて、提灯行列などで祝ったものだ。その裏には、徴兵されて戦地にいった若者たちを死傷させ、中国の多くの人たちを苦しめていることなど、一つも知らされることもなく、考えることもなかった。その時代には、戦争一途に日本国民全体を突き進めるための方法で、少しでも志気がぶつてはならないので、不利な報道は当然避けられて

いたのだ。だから国民は本当のことは知らされずに、当時の国の方向に従わざるを得なかったことになるのだ。私たちは小学校に通っていたが、学校での教育方針も軍事色でぬりつぶされていたため、戦争は正しいものであり、日本は神の国なのだから、どんなことがあっても負けることはないのだと教えられてきた。子供心にそれを信じていた。

昭和一八年ごろから、今まで勝利、勝利でうかれていた日本の戦局が不利になってき始めた。これは南の方の島が、次々と米軍に陥落されてからだ。特にサイパン島が陥落してからは、その島を基地にして、B29という爆撃機が飛来し、東京の空を襲って、また戻っていくことのできる距離のところに基地をつくってからだ。最初は、日本の国内にある軍事施設や、軍需工場を中心に爆弾が投下された。その轟音はかなりの遠くまで響き渡り、幾度も聞いた事を覚えている。その度に、幾人もの人たちが、機械とともに吹き飛ばされていたのだ。日本の家屋は木造の建物が多いので、もっぱら油脂焼夷弾しょういが使われた。焼夷弾は長さ約七、八〇センチ程で、直径一

○センチぐらいの円筒形で、中に油が詰め込まれていて、落下の途中で火が燃えだし、地上や建物の屋根などに当たると四方八方に火のついた油が飛び散るといふ仕掛けになっている。その円筒形の焼夷弾が何十本もまとまって一度に落とされるのだからたまたまのものではない。日本の家屋は一たまりもなく燃えつきてしまうのだ。またこの焼夷弾の直撃を受けた人もあって、まともに当たれば当然に命を落とすことになるのだが、一命は取り止めたが、顔や体中にやけどを負った人や、手足を切断された人たちも数多くいた。全く生き地獄とはこのことであろう。

私は当時から梅里一丁目の現在の住まいにいる。東京の下町方面は昭和二〇年の三月九日の夜から一〇日の朝にかけて全滅にされてしまったが、山の手方面は同年の五月二五日にほとんど焼けつくされたのだが、私の家の近くから青梅街道にかけては、二日早い二三日の夜に襲われた。当日家の前に立って、空を見つめていると、急にものすごい轟音がした。一瞬爆弾かなと思う程の音がした。私は無意識に音から逃がれようと空地の方へ走った。それは走っても間に合うものではない。やはり例の焼夷弾が、青梅街道から南へ約一〇〇メートルの範囲に落下したのだ。その時は小さい範囲ではあったが、瞬く間に火の海となってしまった。私も近くの人たちと消火につとめた。私たちが出来ることはバケツに水を汲んでかける程度で、とても猛火には効果はなかった。私は全身水をかぶり、夜明けごろには冷えて寒さを感じ、その日に高熱を出した覚えがある。私の家はどうか焼失は免れたのだが、

近所の多くの人たちは家を焼かれて途方にくれている様子だった。

今のセシオン杉並のあるところは、昔は大きな野原だったが、そこへ杉並第十小学校が建てられた。昭和十二年である。ちょうど中国との戦争が起きた年であった。私が小学校三年生で、初めての新しい教室には、新しいペンキのおいがただよって、皆さんではしゃいだ思い出が今でも残っている。

私の家の近所が焼失した二日後の二五日の夜、山の手方面の家が全滅した時であった。前の日に高熱を出してしまった私は、その日は消火の手伝いも出来ないもので、空地にふとんを抱えて避難をしていた。その空地というのが、杉十小学校の前の今の都営住宅のあるところだった。そこには、いろいろなところから避難してきた老人たちが多いようだった。周り是一片の火の海で、火の粉や、火のついた板片さくなどが風にあおられて降ってくるという状態だ。そのうち、一つの焼夷弾によって、杉十小学校に火の手が上ってしまった。私の避難していた目の前で燃え上っていった。私はその時に、初めて学校にいった小学校三年生当時や、それから三年間、友達たちと過ごした懐かしい思い出が、私の頭の中を駆け回り、むなしさで一ぱいだった。それから三か月後に、広島・長崎に原子爆弾が落とされ、言葉で表されない程の無残な姿を残して戦争が終わっていったのだ。

この戦争によって、数限りない人たちが不幸にあり、人生を狂わしたことであろう。もう二度とこんなことはないと思ふし、あつてはならない。

空襲

東海林 重敬

●下高井戸四丁目

(昭和二年生まれ)

一 B 29 の爆弾投下

昭和二〇年六月ごろ、敵機動部隊は、沖縄を攻略、硫黄島を攻撃、本土攻撃を繰り返し始めた。私は、日大世田谷予科理科の二年生で、一年生の指導生徒として学校に残っていた。文科の学生は、戦事特令で、昭和一九年九月学業を捨て、ペンを銃に持ち代えて祖国のために戦場に臨んだ。理科系は兵役猶予ということで、予科二年、学部二年合計四年間は、勉強せよということで兵役は免れた。

昼間、空襲警報が鳴る度、一年生を地下教室に避難させ安全を図っていた。在京の一年一五〇人、二年の指導生徒は一〇名であった。二年生は三六〇名いたが、昭和二〇年四月、神奈川県横須賀海軍工廠の追浜分廠に、学徒動員で行っていた。残された我々は、教師による勉強も少なく、自習する事が多かった。

米国のB 29爆撃機は、昭和二〇年五月独乙^{どいつ}の降伏後は、一段と頻繁に東京を空襲するようになった。いつも一年生を地下教室に避難させた後、屋上に上り上空を見、敵機の襲来す

る経路を見守った。敵機は数機ずつ編隊を組み、駿河湾から富士山を目標に飛来、富士山の麓で直角に東に向きを変え、一路東京へ進行して来た。ちょうど学校の北側の上空を悠々と飛んで、都心に向かって侵入、神田・本所・深川等に爆弾を投下した。

このB 29の空襲に備え、日大予科の西側の森に、陸軍の高射砲陣地があった。高射砲から発射する砲弾は、高度約一〇〇メートルで飛来する敵機には届かず、僅か数百メートルのところまで炸裂していた。

一年生を緊急避難させ、校舎の廊下を駆け廻っていた時、体にズシンという鈍い衝撃を感じて、思わず立ち止まってしまった。教室の窓越しに、約一〇メートル置きに校庭の南側に、太い土煙が数本立ち上った。B 29からの爆弾投下である。幸い教室には誰もいなかった。一年生は地下教室や鉄筋の校舎に避難させたのだが、念のため大急ぎで見廻っている時のことであった。爆弾は、陸軍の高射砲陣地を狙ったものであるが、遙か先の日大のグラウンドの端に落ちたのである。今、

一〇〇メートル手前に落ちたら、その時は、学校の校舎は爆破され死傷者が続出したと思う。私も木造校舎と共に吹き飛んでしまったことだろうと思った。背筋がゾツとして、恐ろしさが込み上げてどうしようもなかった。

二 敵戦闘機の機銃掃射

同じ昭和二〇年五月ごろ、敵機動部隊は、戦艦、空母の優勢に任せ、一挙日本を殲滅せんと昼夜東京を空襲した。

五月のある日の昼近く、けたたましい空襲警報のサイレンが鳴り、「空襲警報」を連呼しながら一階の廊下を走り、一年生の避難誘導をしていた時である。耳を突き刺すような金属音とともに敵戦闘機が飛来し、パンパンと鋭い音がした。余り急激で高い音だったので、ドキッとした。敵の戦闘機から機銃掃射を受けたのだ。続いてもう一機からも機銃掃射を受けた。鋭く何かがハジける音がした。一体何だろう。不思議に思った。一瞬立ち止まったが、頭がポーツとして何も考えつかない。

一年生は、教室に駆け込もうとしてまだ廊下にいる者も数名いた。他の指導生徒も一、二名いた。互いに顔を見合わせ、「凄いなあ。まあ無事で良かった」と声を交わし、無事を喜び合った。機銃掃射したのは、敵空母から飛来した米戦闘機、ロッキードP38であった。日本の優秀な戦闘機零戦に對抗して量産された、双発双胴の米国最新鋭の戦闘機である。

空襲警報解除の後、鉄筋校舎の外を見廻って驚いた。ロッ

キードP38が狙ったのは、明らかに校舎であるが、鉄サッシのガラス窓を外れ、サッシとサッシの間の化粧タイルに銃弾が当たり、機銃掃射は失敗したのだ。それにしても、三階校舎（一部四階建て）の二階から上は何も被害を受けず、一階の北側廊下の窓側だけが狙われたわけは何だろう。超低空で飛来、建物を威嚇射撃したものと思う。そのやり方は、無差別爆撃にも似た、所構わぬ無謀な攻撃といえよう。もし射撃手の引金が一瞬早く引かれるか、一瞬遅く引かれていれば、銃弾は鉄サッシに嵌込まれた窓ガラスを破り、右往左往している私たちの誰かに当たり、必ず犠牲者や負傷者が続出したものと思う。機銃掃射で剥がれた化粧タイルを見て、誰も怪我人が出なくて良かったと、つくづく身に染みて感じた。今日の出来事を生徒課長である専任教師に報告し、労を犒って貰った。

東京最後の空襲

●阿佐谷北四丁目

神保 いね

(大正二十一年生まれ)

今日は五月二五日、朝から雷が鳴り始め、晴れたり、曇ったり、どんよりとした空模様でした。ふと、あ、今日は我が家が空襲で焼け出された日だったなアと、思い出しました。もう四七年も経ったのだ。日々の生活に追われて、忘れていました。記憶も随分と薄らいできましたが、その当時の事を思い出して、ペンを取りました。

当時、和田本町一〇七七番地にて、昭和一八年に世帯を持ちました。主人二五歳、私二一歳でした。世帯を持つのも大変で、家財道具を揃えることもままならず、疎開する人を尋ねて譲り受けたり、知人に頼んで余分な物を頂いたり、やつとの思いでどうか世帯らしくなりました。

昭和二〇年三月一〇日、東京下町でB29による大空襲で、夜空を真赤に染めました。私は三月一八日出産予定の大きなお腹を抱えていました。主人は警察官で、空襲警報が鳴ると休みであっても出勤し、解除になると帰宅ということの繰り返しで、随分と心細く、さみしい毎日でした。心配していたお産は、「三月一六日」に男の子を無事、出産しました。幸い

にもその日は、空襲もなく平穏でしたので、本当に助かりました。でも、その後も毎夜のようにB29の来襲で、夜もおちと寝ていられない日々が続きました。その中での子育てです。空襲の都度、灯りが目標にされるから全部消灯で、しかも初めての子育てですので知識もなく、授乳、おしめの取り替え、あげくは母子で泣いておりました。でも翌朝、主人も勤めより帰宅し、近所の方たちも「昨夜は大丈夫でしたか」と尋ねて下さり、ほっと気がなごみました。そして、お互いに無事だった事を喜び合いました。

しかし、予期した日がやって来ました。「五月二五日」の東京大空襲です。そして我が家も戦火のため、焼き払われたのです。「五月二三日」は、堀の内の火葬場が焼かれ、近くまで燃えてきたのですが、幸いにも我が家の方は助かりました。皆んなで無事を喜び合いました。その束の間、一日おいて我が家も全焼してしまいました。主人は、宿直で不在でした。

夜八時、ラジオ放送で、「B29大編隊西部上空侵入焼夷弾投下、延焼中」と同時に、「女、子供は早く避難しなさい」と声

をからしております。当時、「和田」は、まだまだ空地が遠近にありました。乳飲子を背負い、両手にいくつかの荷物を持ち、避難する人の流れについて歩きました。早く歩きたくても、子供が心配で歩けません。日ごろ、災害時に赤ちゃんを背負って行動する時には、時々お尻をつねって泣きだせば元氣と言われていたので、荷物を下に置き、無理に起こしてつねってみたりしました。しばらくして、もうここまで来れば大丈夫と言われ、着いた所は、「救世軍、療養所」近くの空地でした。入院患者が次々と、担架で運び出されています。また、大きな荷物を背負った人、リヤカーに荷物を積んで来る者、広場もたちまち一杯になってしまいました。ひとまず腰をおろしました。でも主人はどうしているだろう、後に残った人たちはどうしているだろう、と気にしながら、我が家の方を見ると火は燃え上がり、夜空を真赤に染めていました。回りを見ても知人の姿は見当たらず、話しかけてくれる人もいません。その後の情報も入ってはきませんでした。恐ろしさとし心細さ、こんな長い夜は初めてです。やっと火の手も下火となり、夜が白々と明けてきました。皆、そろそろ動き始めました。まあ、よかったですと思い私も家の方へ戻ってみようと思ひ、近くまで行きましたが、まだ電柱が燃えていました。熱くてとても近づけず、様子を見ようとまた空地へ戻りました。しばらくして、やっと我が家へ着きました。見渡す限りの焼け野原。まだ所々で燻くすぶっています。わずかの空地で耕し、折角作った大根の葉もチリチリに焼けていました。次々と近

所の人たちも帰って来ました。どの顔も疲れ切っています。皆、お互いに焼けたのだから、諦めるより仕方がない。でも、けがもなく無事でよかったです、と手を取り合って慰め合いました。

父が駆けつけて来ました。私の顔を見て「無事でよかったです」と一言、赤ん坊の頭をなでました。思わず涙が一筋、ほほを流れました。焼け出されたからといって泣いてなんかいられない。これからの事を考えなければ、と氣を持ち直し、これからの生活を考えました。和田の人は、取りあえず女子美術に避難するようにとの事、やっと学校に落ち着きました。子供を背中よりおろし、乳をふくませました。焼けたショックと疲労のため心配していましたが、お乳もよく出て、子供もよく吸いました。子供の笑顔をいつまでも何の考えもなく、ただ見つめていました。

心配していた主人もやっと私を探し当て、「とにかく皆無事でよかったです」とたった一言。しかし学校での生活も大変なものでした。主人は焼け跡の始末、家探し、私は配給物のため行列、戻ってみると干しておいた洗濯物は盗られてしまう情けなさ。やっと家が見つかり、落ち着く事が出来ました。

阿佐谷六丁目一三〇番地で現在は、阿佐谷北四―二九―四に住居表示変更で変わりました。また、一からやり直します。戦争は、まだまだ続いております。このような苦勞悲惨なことは二度とないよう祈りながら、ペンを置きます。

私の戦争体験記

● 調布市深大寺北町五丁目

杉本 知枝子

(昭和四年生まれ)

学徒動員——軍需工場での事——

昭和一九年七月、五年制女学校の三年目の夏休みの直前から、一四歳だった私は、昭島の昭和飛行機という軍需戦闘機の製造工場の工員として、級友たちとともに動員され、それからは、土曜も日曜も、もちろん夏休みも無く、学業からは全く離れて、毎日毎日働くことになりました。開戦以後、ますます力の入った軍国主義教育の落とし子たる私たちは、純粹に御国のためと信じて、昭島駅から工場まで行進をし、軍歌を合唱しながら、担任の先生と級友たちと一緒に、毎日工場に通いました。

私たちの仕事は、工場の工員を班長に一〇人から一二人をひと組として班をつくり、第二工場で飛行機の部品を造るための鋳金の作業でした。

こうした作業をするには、大変な危険が伴いますが、なかでも忘れられない事件があります。

ある日、いつものように仕事をしていますと、にわかにあたりが騒がしくなったので、ふと見ると、一メートル程離れ

た、ボール盤という穴あけの電動機械の操作をしていた、同じく学徒動員の男子学生が、人差し指と中指の無い左手を見つめ、青ざめて立ちすくんでいるのです。

彼は涙も出ないまま、まわりの人に医務室に連れていかれましたが、彼のいたボール盤の下には、血のしたたる二本の指が転がっていました。間もなく昼休みになり、昼食をとろうと思いましたが、空腹にもかかわらず、さすがにのどを通りませんでした。

他にあつた事故では、二〇〇〇トンプレスという型ぬきの動力機械で作業していた女子学徒が、型をぬくものと一緒に自分の手をはさんで、肉や骨は全部つぶれて、白い神経だけが残ったという話も聞きました。

そうした事故の間にも、警戒警報や空襲警報は毎日のように鳴りひびき、発令とともに作業は中止され、少し離れた防空壕に避難しました。壕の中では、わずかなり大豆を惜しんで食べながら、級友と一緒に童謡を歌いながら、発令解除の知らせがあるまで過ごすのです。軍歌は、歌っても楽しく

ないので好きではないし、アメリカ民謡は固く禁じられていて歌えませんでした。私たち女子学徒にとっては、この「童謡タイム」は唯一ほっとするひと時でした。

隣接していた陸軍の立川飛行場には、たぐさんの爆弾が落とされましたが、昭和飛行機には扱っていた飛行機が、Dという米国人の設計したものでしたので、アメリカは攻撃不要と判断したようで、とうとう一発も被爆しませんでした。

動員中の思い出は、まだたくさんありますが、私は、翌年の三月に母の田舎に疎開したため、その後は工場を訪れることもありませんでしたが、今は、ただ懐かしく、一度行ってみたいと思います。

天沼陸橋に爆弾が落とされた時の事

昭和二〇年の冬、当時、私は阿佐ヶ谷の自宅から、昭島にある昭和飛行機という軍需工場まで、学徒動員のため、毎日、中央線と青梅線乗り継いで通っていました。

ところがある日のこと、仕事も終わって駅まで行進して帰るため集合していますと、引率の先生が心配顔で私たちのところに来て、中央線に不通箇所が発生したらしいとおっしゃるのです。どうしたものかと、皆当惑していました。その後の情報によると、吉祥寺までは電車が動いているというので、工場の近くに親戚のある人四、五人を残して、他の生徒は駅へと向かいました。途中、この事故は、私の家からそう遠くない天沼陸橋に爆弾が落ちたためのものらしい

という話が、何とはなしに耳に入ってきました。不安と恐怖が、未だ幼い私たちの胸を締めつけましたが、とにかく電車に乗り、吉祥寺まで辿り着きました。

現在のように電話も普及しておらず、家族に連絡をする事も出来ずに、私たちは、帯芯で作った肩下げ袋の中のいり大豆を一粒ずつ口に入れては空腹をごまかしながら、先生に付き添われ、歩いて帰りました。やっとの思いで阿佐ヶ谷に着いたころには、夜も、もう大分遅く、あたりも真暗でしたが、当時は、そんな時間に少女がひとり歩きをしても、若い男性が徴兵で町にいないのか、それとも、皆、食べるのが精一杯で、いたずらなどする余裕が無かったのか、不思議と危険な思いをせずに、なんとか家まで帰り着いたのです。

戦後、日本が降伏していなければ、B 29の広島、長崎に次ぐ投下目標が、あの天沼陸橋であったという話を聞いて、私は知らず知らず身に震わせたのでした。

五月二五日の空襲体験

●永福三丁目

高崎 慎一

(大正一五年生まれ)

昭和二〇年五月二五日、杉並区永福町の自宅で眠りについていた私の耳に、不意に空襲を知らせるサイレンが聞こえて来た。その前日まで当時早稲田大学理工学部一年生であった私は、富士の裾野で行われた野外演習に参加して帰ったばかりであった。演習最後の夜、B 29の大群が相模湾の方から富士山を目標として飛んで来て、やがて東京の方角に姿を消して暫くたつと、裾野の東の方角が夕焼けの時のような真紅の色に染まり始め、自宅も今焼けてしまったのではないかと心配しながら翌日帰京した。品川で解散になり、演習中使用した鉄砲を持ったまま家に帰り、永福町の町並が出発の日と同じ姿で残っているのを見て、安心して就寝したばかりであったのである。

まず水で目を洗い眠気をさまし、今度こそ我が家も焼け落ちると覚悟しながらゲートルを巻き、自宅の防空壕に貴重品を入れ終わったころ、B 29の特徴ある爆音が聞こえ始めた。我が家から西永福駅を隔てた井の頭街道の傍らにある高射砲陣地から対空砲火が烈しく撃ち出され始めた。壕から外に出

てみると、探照灯の交差する間にB 29の機影が暗闇の中から明るく浮き出して見えるのであるが、高射砲弾は歯がゆい程命中せず、B 29は悠々と編隊を組み頭上を越え、新宿中野方面に焼夷弾を落とし始めた。両国の花火の数十倍あわせたような光の線が夜空を色どる中に新宿方向で火の手が上がるのが見えて来た。

そのうち、私たちの頭上にB 29が降下してくるとともに焼夷弾が束になって弧をえがいて、ちょうどタン屋根の上に小便をひっかけるような音をたてて落ちて来た。烈しい落下音とともに永福町駅近くのドーム状の電車車庫の屋根から見る見る中に炎が上がって来た。家の近くにもひっきりなしに焼夷弾が落ち始めた。家の裏手は井の頭から和田堀にかけて神田上水を囲んで細長い田圃たんぼがあり、畑もあちこちにあったので、延焼の危険を避けて貰うために母、姉に貴重品を持たせて防空壕から安全な方角に逃げて貰った。私は自宅の延焼を幾分でも防げるのではないかと思って、井戸水を汲んで家の周りにある杉やモチの木に夢中になって水をかけた。焼夷

弾の落下音が益々近づいてくるので、外の様子を見に道路に出て見ると、家の前の道路と永福町駅方面の道路との交差するあたりから白い煙が猛烈に吹き出してくるのが望見出来た。

いよいよ危険だと思つて、父と弟と三人塚を出て原の方に逃げることにした。焼夷弾は弧をえがいて落ちてくるが、地上に落ちるまである程度の時間があるので右、左と落下する方角を避けながら逃げる。目の前に落ちて来た焼夷弾が無人の家の玄関に落下した。今なら数人で消火出来ると思つても、逃げるのに急いで行きすぎて振りかえつて見ると、家の中に火炎が吸い込まれ燃え上がるのが見えた。やつと畑に出てみると、リュックをかついだ人、フトンを持って来た人、種々な家財を持った人たちが集まつていた。父は気が動転したのかバケツ一つを持って逃げて来た。

B 29が飛び去つたのを見て我が家に駆けつけて見ると、家の周囲の所だけ焼け残つていた。家に入ると熱風のために枝葉がザワザワとゆれているが、水をかけたためか蒸気が葉の表面から立ち昇るのを感じた。更に、水をかけ火の粉が飛んで来て庭の中で赤く燦るのを消しとめたりしているうちに朝を迎えた。心配していた母、姉も帰つて来たが、母はあわてて溝の中に落ちたとのことだった。西永福周辺は、商店街と住宅街の一部を残し完全に焼けてしまったが、井の頭街道の現在樺島病院のある裏手の松林と浜田山近くの三井グラウンドでは、相変わらず黒煙が盛んにあがっていた。聞けば、軍が航空燃料をドラムに入れて地下に埋めておいたのに引火して

燃えているとのことだった。永福町車庫に置いてあつた電車は全部燃えてしまい、井の頭線は渋谷駅と吉祥寺駅に停車してあつた四輦が僅かに残つただけで、運転休止の状態だつた。

その日は、演習で使つた鉄砲を大学に返さなければならぬので、鉄砲を肩に吊し自転車に乗り、新宿戸塚を抜けて早稲田に行った。井の頭通りより甲州街道に入ると、焼け出された人々が三々五々焼け残りの荷物を持って八王子方面に歩いて行く。周囲は焼跡特有の皮を焼いたような臭いが漂い、新宿方面にかけ一面の焼跡が続き、焼トタンで覆われた戦災死した人が未だ処置されずに放置されていた。悲しい光景の中でも思い出されるのは、焼け残りの荷物をリヤカーで運んでくる家族の中、後から押していたお下げ髪の娘さんが、私と目があつた途端泣き崩れた姿が今でも目に焼きついて離れない。新宿を抜けて戸塚に入った一面の焼跡の中で、僅かに二、三軒残つた家の人々が、道路に机を並べ湯茶の接待をしているのも印象に残つた。

大学も昨夜の空襲で、恩賜記念館を始め、木造建築のほとんどが灰になっていた。三々五々鉄砲を返しに来た友人の中で、焼けた鉄砲の残骸を持つて来た友人もいた。学校近くの大防空壕の中では多数の人が窒息死したのであるが、前前日まで富士の裾野の兵舎で共に話し合つていた瀬戸内出身の友人が、この壕で亡くなつたのも悲しい思い出である。

あれから四七年、私共の周囲は目を見はるようになつたのであるが、この五月二五日と開戦の日、終戦の日は今でも鮮明に思い出されるのである。